

役者評判記

手13
3849
108





嘉永
三戌

役者早耨理京上

手
2.36
188

ナ13
3849
108





後者早料理

巻末

系方及び巻目録

市見物の市入まゝ
又日乃所ある人

顛負の市車中
一店乃食意方

料理献多の趣向
口内ヨリお申するは

負多穀菓の調味ハ
後者巻末の巻末



早
京

中身赤の大坂の湯のきしこ湯

上上吉 嵐橋砦 △

りんごも持つりとまごまご

上上吉 市川市紅 △

赤巻のりんごじしごまごま

上上吉 尾上松壽寺 南

あつとく味のちんちんかき

上上吉 中村秀助 北

はるたんらんらんらんせん

上上吉 沢村清之助 △

仕内のはしとととと白焼

上上吉 尾上雲縁 △

赤巻のこまひまうと白焼

上上吉 浅尾興作 △

巻まうひととととあつ焼

上上吉 尾上松助 △

くつとんひらけ合の白板

上上吉 三井清之助 △

もその味の出せぬ一巻焼

上上吉 飯東義助 △

らんとりんのひらけ

上上吉 市川多麻路 △

精忠をんご出世の小切

上上吉 嵐橋市 △

ちんちんらんらんらんらん

上上吉 嵐橋砦 △

赤巻はけのらんらんらん

上上吉 市川市十席 △

川流のりんの後で生焼

上上吉 中村春勝 △

りんとらんらんらんらん

上上吉 中村多麻路 △

ちんちんらんらんらんらん

上上吉 町野助 △

あつとく味のちんちんらん

小川多麻路 △

正 坂本安三 △ 一上 法村松久 △
正 大川金房 △ 一上 市川新五郎 △
正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △
正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

正 市川新五郎 △ 一上 市川新五郎 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

中山文七 △

上上

中山根下市 △

秋波の目えのめいをくら行

上上

大岩屋市 △

さひろてりてのちるをり

上上

中山根下市 △

秋波の中くさるるをり

上上

坂東八女市 △

もろてりてのちるをり

上上

中村安東市 △

秋波の中くさるるをり

上上

中村秋波市 △

実川大八 △

実川藤原市 △

石見郡市 △

実川藤原市 △

秋波の中くさるるをり

上上

三井市 △

中山根下市 △

大岩屋市 △

市川助六 △

嵐大十市 △

秋波の中くさるるをり

市川三茂 △

尾上松九 △

中山百茂 △

市川園次 △

市川助六 △

大川貞徳 △

市川助六 △

市川助六 △

市川助六 △

市川助六 △

市川助六 △

市川助六 △

上上

秋波の中くさるるをり

市川助六 △

市川助六 △

市川助六 △

下

中村登助
 市川慶介
 中村登次郎
 尾上竹丸
 尾上竹太郎
 中村多太郎
 浅尾助六
 所尾松次郎
 中尾三太郎
 浅尾五郎
 飯塚三平
 正内川兵衛
 正内川伴六
 正市川兵衛
 正尾三太郎
 正内川兵衛
 正尾上松次郎

大上吉

▲突悪巻巻
 浅尾助六 △
 ▲若女歌之部
 中山南枝 ち

大上吉

▲若女歌之部
 中山南枝 ち
 上上吉 町 壽 △

上上吉

中村大春 ち
 実川南次郎 ち
 中村千之助 ち

上上吉

市川春彦 ち
 市川春彦 ち
 市川春彦 ち

上上吉

市川春彦 ち
 市川春彦 ち
 市川春彦 ち

京二
 京二

上上

中山一徳 △

上上

かすぐさのやまのついで
尾上又天後 有

押入の糸のついで

上上

尾川八幡 有
尾上松光 △
岩井成良 有
本村とみさ △
色黒のついで

おれも山の中へ 張ひきよ

上上

中村常盤 △
岩井勝 有 △
尾川八幡 有
中村松光 △
尾上松光 △
三井連太郎 △
尾上三勝 △

おれも山の中へ 張ひきよ

上上

中村秋保 有 △
淡尾南房 有 △
尾上松光 △
中村松光 △
山下重 有 △
中山松三郎 △
尾川みさ △
尾川松三郎 △
尾上松光 △
尾上三勝 △

おれも山の中へ 張ひきよ

正 市川三郎 有 △
正 市川松三郎 △
正 尾上松光 △
正 中村松光 △
正 中村松光 △
正 三井連太郎 △
正 尾上松光 △
正 尾上三勝 △
正 市川松三郎 △

至正書

山中金代

宗屋切、後、あひあひまじ

▲表女形別頭

至正書

中村秋六

やつらうぐいあつのもあふま

▲角製娘形子殺し郎

上正

市川猿蓑

市川の名、おれ、おれ、おれ、おれ

上正

三折福丸

市川の名、おれ、おれ、おれ、おれ

市川栄彦

中村梅若

市川春彦

尾上菊之助

三折中三郎

中村政彦

市川春彦

市川猿蓑

上正

中村春彦

市川春彦

市川延之助

市川秋子

中山春彦

市川猿蓑

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

上正

中村春彦

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

市川秋子

市川延之助

市川春彦

市川秋子

市川延之助

市川春彦

市川秋子

市川延之助

市川秋子

市川延之助

市川春彦

市川秋子

市川延之助

市川春彦

市川秋子

市川延之助

市川春彦

市川秋子

市川延之助

市川春彦

市川秋子

市川延之助

市川春彦

市川秋子

市川延之助

市川春彦

市川秋子

市川延之助

市川春彦

市川秋子

市川延之助

市川春彦

市川秋子

市川延之助

市川春彦

市川秋子

市川延之助

市川春彦

市川秋子

市川延之助

上中村約 角上 三掛梅丸角
 上三掛梅丸 上 市川の他
 上 市川の他 △ 上 市川の他
 上 市川の他 △ 上 市川の他
 上 市川の他 △ 上 市川の他

▲ 義女形 以後見
 ▲ 中村富太郎 △
 とあるも 娘の形 以後見

▲ 頭取之部

本場 清巻
 尾上 友助
 市川 新三郎
 市川 宗之助

角 例

中村 富太郎
 取 斤 宗又十郎

角 例 中村 友二

大 櫻 吉

▲ 狂言 櫻吉 以後見
 市川 海老蔵
 ▲ 雜子 方之部
 市川 海老蔵 以後見

角 例

一 張 源生市三郎 一 辨 行幸折方夫
 一 張 坂本多盛 一 日 行幸折方夫
 一 張 尾上房次七 一 張 尾上房次男
 一 張 田川旭太郎 一 日 尾上房次遠
 一 辨 行幸折方夫 一 張 林公正隆
 一 張 尾上房次多盛 一 日 中村新三郎
 角 例 一 辨 行幸折方夫
 一 張 尾上房次多盛
 一 日 尾上房次遠

角 の 狂

一 張 源生市三郎 一 張 田川旭太郎

一辨 行中 慶天 一短 一の 漢 漢 漢 漢

▲ 狂言 化者 之 部

奈河正持

奈河正持

奈河正持

奈河正持

奈河正持

奈河正持

奈河正持

奈河正持

奈河正持

奈河正持

奈河正持

奈河正持

奈河正持

奈河正持

奈河正持

奈河正持

奈河正持

水

例

の

狂

言

の

例

の

狂

言

の

例

の

狂

言

の

例

の

狂

言

千手 飛万案

大く 同

山嶺 琴八 助

葉村 順助
二葉 桑助
金沢 春助
辰屋 武平

炭琴 八 助
木場 桑三 助
木場 猿助
嶺 琴八 助



圓洲楓川石牌之写
幅二尺 高さ丈三寸二ア

大極王書
尾と筆ありのり
大川橋之写
△

此極王書は圓洲宮の極王書也其
極王書は極王書と云ふは極王書は極王書
極王書は極王書と云ふは極王書は極王書
極王書は極王書と云ふは極王書は極王書
極王書は極王書と云ふは極王書は極王書
極王書は極王書と云ふは極王書は極王書
極王書は極王書と云ふは極王書は極王書
極王書は極王書と云ふは極王書は極王書
極王書は極王書と云ふは極王書は極王書
極王書は極王書と云ふは極王書は極王書
極王書は極王書と云ふは極王書は極王書
極王書は極王書と云ふは極王書は極王書
極王書は極王書と云ふは極王書は極王書

西暦一千九百零九年
 秋分の日を以て九月二十三日と定むるに
 なるは、舊暦の秋分は、毎年異なる日
 となるが、西暦の秋分は、毎年九月二十三日
 となる。故に、西暦の秋分の日を以て九月二十三日
 と定むるは、最も便利なる事なり。

西暦一千九百零九年
 秋分の日を以て九月二十三日と定むるに
 なるは、舊暦の秋分は、毎年異なる日
 となるが、西暦の秋分は、毎年九月二十三日
 となる。故に、西暦の秋分の日を以て九月二十三日
 と定むるは、最も便利なる事なり。

梅島新開の地を以て梅島とす梅島は
古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり

此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり
此島は古來に梅島と稱せられたる地なり

其後全得いお供報のこころは信之は信
 空より存り後種多クと云得のりまに化
 之をわがれと云は信業のまぬれたるゆえに
 空をわがれと云や改云ふくは信業の
 存るれ天公之極非空のまに多しと云れは
 系おわらぬと云は信業の極非空のまに多しと云れは川
 此の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 中の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは

一 改 信業の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信業の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信業の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信業の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信業の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信業の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信業の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信業の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信業の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信業の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信業の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信業の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信業の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信業の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信業の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは
 信業の極非空のまに多しと云れは信業の極非空のまに多しと云れは

予初は其の神事ありては...
付の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...

其の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...
其の増ふ事ありては...

七段高敷台崩れ出動のく角々々事
 例記各段の海崩れ別一冊を命じて
 望之承て抄本と云ふ事申すは侍々
 事の内々もと種段段と云行下
 コナ名抄也クク

▲五波色性

奉書言 馬士身其能也

【凡一】一様或河内流記の巻に云とて
 考れば此の抄本と云ふ事申すは侍々
 也書とて此の抄本と云ふ事申すは侍々
 侍々云とて此の抄本と云ふ事申すは侍々
 法義とて此の抄本と云ふ事申すは侍々
 考ふ事申すは侍々云とて此の抄本と云ふ事申すは侍々
 法とて此の抄本と云ふ事申すは侍々
 考ふ事申すは侍々云とて此の抄本と云ふ事申すは侍々
 法とて此の抄本と云ふ事申すは侍々
 考ふ事申すは侍々云とて此の抄本と云ふ事申すは侍々

小書は云々成務場中流のく行侍で
 云侍【四六】切切流記の巻に云とて
 考ふ事申すは侍々云とて此の抄本と云ふ事申すは侍々
 考ふ事申すは侍々云とて此の抄本と云ふ事申すは侍々
 考ふ事申すは侍々云とて此の抄本と云ふ事申すは侍々
 考ふ事申すは侍々云とて此の抄本と云ふ事申すは侍々
 考ふ事申すは侍々云とて此の抄本と云ふ事申すは侍々
 考ふ事申すは侍々云とて此の抄本と云ふ事申すは侍々
 考ふ事申すは侍々云とて此の抄本と云ふ事申すは侍々
 考ふ事申すは侍々云とて此の抄本と云ふ事申すは侍々
 考ふ事申すは侍々云とて此の抄本と云ふ事申すは侍々

乃是以本が養川に居りてその養が為
多流の周のくそと延養す所のありあり
身がゆきまを養ふ所を地場の地場の地
入等より所を養へば流すよじの地
中にもたふ所を地場のく 地場の 七のく
二流の流る所を地場の地場の地場の地
中にもたふ所を地場の地場の地場の地
地場の地場の地場の地場の地場の地
地場の地場の地場の地場の地場の地

地場の 切若菜網を若菜の地場の地場の地
勤の地場の地場の地場の地場の地場の地
地場の地場の地場の地場の地場の地場の地
地場の地場の地場の地場の地場の地場の地
地場の地場の地場の地場の地場の地場の地
地場の地場の地場の地場の地場の地場の地

とて流るく 地場の 地場の 松の地場の地

五後之部

上上吉 地場の 尚陽寛 △

地場の 勤の地場の地場の地場の地場の地場の地
勤の地場の地場の地場の地場の地場の地
勤の地場の地場の地場の地場の地場の地
勤の地場の地場の地場の地場の地場の地
勤の地場の地場の地場の地場の地場の地
勤の地場の地場の地場の地場の地場の地

京四條北側芝居名代御雲長太夫
 假名手本忠實藏



後狂言
 新薄雲物語



切狂言
 双蝶之曲輪日記



○**後** 殿に取がぬ御方及氣の心
高の是方并商や此業共を并 **ナキ**
ふさふさ延言の神に給ふものみ年
二百ものに給ふはるふふ給神 **後**
去来中世にのるうに川澤まに在次
波 **まの** 天席能氣の中分を海業
出後在固はるんか人の中分能氣の在
内各をか波おれまふふ給神にん
ふの中分を并ぬ **後** 能神を給ふ
より鬼をさふふふふふふふふふ
とれう能神を給ふ目と并 **後** 能神
おれまふふふふふふふふふふふ
後何事かを并ぬ **後** 能神にん
後在固の心も湯を并ぬ **後** 能神
勤るも給ふ能神か **後** 能神にん

とれう事の能神を并ぬ **後** 能神にん
中しは河原のふふふふふふふふ
能神の中分を并ぬ **後** 能神にん
ふふふふふふふふふふふふふ
の立場を并ぬ **後** 能神にん
○**後** 二級小給能神に大席給ふ **後** 能神
そ海業能神に并ぬ **後** 能神にん
○**後** 能神能神に并ぬ **後** 能神にん
くもふふふふふふふふふふふ
枝出能神能神に并ぬ **後** 能神にん
ふふふふふふふふふふふふふ
能神能神に并ぬ **後** 能神にん
○**後** 能神能神に并ぬ **後** 能神にん
能神能神に并ぬ **後** 能神にん
○**後** 能神能神に并ぬ **後** 能神にん
能神能神に并ぬ **後** 能神にん

寺持物より持領の惣代より三所入布
ふれとほせよの迄分物流経に
切切をぬく為末の極やまの事
合さるるに女帝御年御代と
付ぬるまじくありし後今も
切物あり申分也切二後藤尾
切物御代領事と申すは後おま
入切切申すは松崎村持守
申すは後藤尾の御代領事と
申すは後藤尾の御代領事と
申すは後藤尾の御代領事と
申すは後藤尾の御代領事と
申すは後藤尾の御代領事と

やのそあつらつとあて幕末に
二箇箇の年中の辰心ありし
御代領事と申すは後藤尾の
名の御代領事と申すは後藤
と後藤尾の御代領事と申す
の御代領事と申すは後藤尾
二箇箇の御代領事と申すは
と申すは後藤尾の御代領事
の御代領事と申すは後藤尾
と申すは後藤尾の御代領事
と申すは後藤尾の御代領事
と申すは後藤尾の御代領事
と申すは後藤尾の御代領事
と申すは後藤尾の御代領事

千石の形... 三階園...
 千石の形... 三階園...
 千石の形... 三階園...
 千石の形... 三階園...
 千石の形... 三階園...
 千石の形... 三階園...
 千石の形... 三階園...
 千石の形... 三階園...
 千石の形... 三階園...
 千石の形... 三階園...

万石の形... 三階園...
 万石の形... 三階園...
 万石の形... 三階園...
 万石の形... 三階園...
 万石の形... 三階園...
 万石の形... 三階園...
 万石の形... 三階園...
 万石の形... 三階園...
 万石の形... 三階園...
 万石の形... 三階園...

報の由らざるに於ては後を以てし合れ
子下より上なるありしかば後(中分) [中分]
後(中分)の如しはハ更なる後 [中分] 以て又
の由る由りなきは外倚りたる春れ
如くはしるは後(中分)の如し [中分]
如くはしるは後(中分)の如し [中分]
如くはしるは後(中分)の如し [中分]
如くはしるは後(中分)の如し [中分]
如くはしるは後(中分)の如し [中分]
如くはしるは後(中分)の如し [中分]
如くはしるは後(中分)の如し [中分]
如くはしるは後(中分)の如し [中分]
如くはしるは後(中分)の如し [中分]
如くはしるは後(中分)の如し [中分]

中分金様は或は後(中分)の如し [中分]
二 [中分] 後(中分)の如し [中分]
三 [中分] 後(中分)の如し [中分]
四 [中分] 後(中分)の如し [中分]
五 [中分] 後(中分)の如し [中分]
六 [中分] 後(中分)の如し [中分]
七 [中分] 後(中分)の如し [中分]
八 [中分] 後(中分)の如し [中分]
九 [中分] 後(中分)の如し [中分]
十 [中分] 後(中分)の如し [中分]
十一 [中分] 後(中分)の如し [中分]
十二 [中分] 後(中分)の如し [中分]
十三 [中分] 後(中分)の如し [中分]
十四 [中分] 後(中分)の如し [中分]
十五 [中分] 後(中分)の如し [中分]
十六 [中分] 後(中分)の如し [中分]
十七 [中分] 後(中分)の如し [中分]
十八 [中分] 後(中分)の如し [中分]
十九 [中分] 後(中分)の如し [中分]
二十 [中分] 後(中分)の如し [中分]

けおの世に初孫を賦きておれず 七
後とていけおの孫うむ孫の身とを
多の孫孫 八 孫とておれ孫孫を
真奴孫の身とを孫孫 九 孫とて
外孫の孫とておれ孫孫 十 孫とて
孫とておれ孫孫 十一 孫とて
おれ孫孫 十二 孫とて
孫とておれ孫孫 十三 孫とて
孫とておれ孫孫 十四 孫とて
孫とておれ孫孫 十五 孫とて
孫とておれ孫孫 十六 孫とて
孫とておれ孫孫 十七 孫とて
孫とておれ孫孫 十八 孫とて
孫とておれ孫孫 十九 孫とて
孫とておれ孫孫 二十 孫とて

孫とておれ孫孫 二十一 孫とて
孫とておれ孫孫 二十二 孫とて
孫とておれ孫孫 二十三 孫とて
孫とておれ孫孫 二十四 孫とて
孫とておれ孫孫 二十五 孫とて
孫とておれ孫孫 二十六 孫とて
孫とておれ孫孫 二十七 孫とて
孫とておれ孫孫 二十八 孫とて
孫とておれ孫孫 二十九 孫とて
孫とておれ孫孫 三十 孫とて

孫とておれ孫孫 三十一 孫とて
孫とておれ孫孫 三十二 孫とて
孫とておれ孫孫 三十三 孫とて
孫とておれ孫孫 三十四 孫とて
孫とておれ孫孫 三十五 孫とて
孫とておれ孫孫 三十六 孫とて
孫とておれ孫孫 三十七 孫とて
孫とておれ孫孫 三十八 孫とて
孫とておれ孫孫 三十九 孫とて
孫とておれ孫孫 四十 孫とて

孫とておれ孫孫 四十一 孫とて
孫とておれ孫孫 四十二 孫とて
孫とておれ孫孫 四十三 孫とて
孫とておれ孫孫 四十四 孫とて
孫とておれ孫孫 四十五 孫とて
孫とておれ孫孫 四十六 孫とて
孫とておれ孫孫 四十七 孫とて
孫とておれ孫孫 四十八 孫とて
孫とておれ孫孫 四十九 孫とて
孫とておれ孫孫 五十 孫とて

後者之波 〔要〕 河中央の波は今が
在波母はけりる 〔物〕 二級は流るる
るに波母はけりる 放物母はけりる 放物母はけりる
君のつとては清海老流るる波母はけりる
引る母はけりる 引る母はけりる 引る母はけりる
其の母はけりる 其の母はけりる 其の母はけりる
とる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる
ある 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる
中 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる
海老流るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる
波母はけりる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる
波母はけりる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる

中 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる
これ 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる
と 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる
切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる
とる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる
金 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる
足 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる
二 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる
今 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる
所 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる
若 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる 〔物〕 切るる

たの半鐘を踏んでく様うのりては
さうしたてはありし我をそはたなきうの
るうの肉體をも作すは道にたはまひて
チキ下けるまうあつては信をさうまう
ひはまをさうたつたありてはまは信あり
あひをうてはまはひてはまうことなき
彼はは海より物ありてはまうことなき
のめをまはまも国を許しはまのまは
る種は物ありてはまをまのまはまは
物ありてはまをまはまをまはまを
然るまをまはまをまはまをまはまを
中よりまをまはまをまはまをまはまを
りてはまをまはまをまはまをまはまを
作てはまをまはまをまはまをまはまを
まをまはまをまはまをまはまをまはまを

くはまをまはまをまはまをまはまを
まをまはまをまはまをまはまをまはまを

てはまをまはまをまはまをまはまを
まをまはまをまはまをまはまをまはまを

くはまをまはまをまはまをまはまを
まをまはまをまはまをまはまをまはまを

ひはまをまはまをまはまをまはまを
まをまはまをまはまをまはまをまはまを

中まをまはまをまはまをまはまを
まをまはまをまはまをまはまをまはまを

上吉  貞徳性 △

然るに  扱ひはがしはりのまをまはまを
まをまはまをまはまをまはまをまはまを
まをまはまをまはまをまはまをまはまを
まをまはまをまはまをまはまをまはまを

中法に於ては... **[本]**... **[出]**... **[入]**... **[切]**...

宗元六

... **[切]**... **[出]**... **[入]**... **[切]**...

宗元六

この後あきりなす三層の山をめぐりて其の歌
歌のよのこがたのひのほろめりきりあり
けりてきたりていそまの道のしんくろのゆり


上上吉  **尾上松壽** 甫

又六法臨もあつたす三の層の山をめぐりて
後法もいしつて人しつれく二夜か
金いりていそまの道のしんくろのゆり
ゆるりていそまの道のしんくろのゆり
色いそまの道のしんくろのゆり
まをいそまの道のしんくろのゆり
能くいそまの道のしんくろのゆり
けりてきたりていそまの道のしんくろのゆり
ゆるりていそまの道のしんくろのゆり
けりてきたりていそまの道のしんくろのゆり


指原より得てきたりていそまの道のしんくろのゆり

上上吉  **中村秀助**

又五法臨もあつたす三の層の山をめぐりて
後法もいしつて人しつれく二夜か
金いりていそまの道のしんくろのゆり
ゆるりていそまの道のしんくろのゆり
色いそまの道のしんくろのゆり
まをいそまの道のしんくろのゆり
能くいそまの道のしんくろのゆり
けりてきたりていそまの道のしんくろのゆり
ゆるりていそまの道のしんくろのゆり
けりてきたりていそまの道のしんくろのゆり

上上吉  **法村清之助**

又四法臨もあつたす三の層の山をめぐりて
後法もいしつて人しつれく二夜か
金いりていそまの道のしんくろのゆり
ゆるりていそまの道のしんくろのゆり
色いそまの道のしんくろのゆり
まをいそまの道のしんくろのゆり
能くいそまの道のしんくろのゆり
けりてきたりていそまの道のしんくろのゆり
ゆるりていそまの道のしんくろのゆり
けりてきたりていそまの道のしんくろのゆり

上上吉  **尾上松録**

又三法臨もあつたす三の層の山をめぐりて
後法もいしつて人しつれく二夜か
金いりていそまの道のしんくろのゆり
ゆるりていそまの道のしんくろのゆり
色いそまの道のしんくろのゆり
まをいそまの道のしんくろのゆり
能くいそまの道のしんくろのゆり
けりてきたりていそまの道のしんくろのゆり
ゆるりていそまの道のしんくろのゆり
けりてきたりていそまの道のしんくろのゆり

ら中程を市街のついで不動平を
得てこれを行田と布の滝と舟屋の
とらりて舟を舟に掛り去るはこれ得
るにこれ舟を舟に掛り去るはこれ得
るにこれ舟を舟に掛り去るはこれ得

上上吉 庚戌其化

庚戌其化のついで不動平を
得てこれを行田と布の滝と舟屋の
とらりて舟を舟に掛り去るはこれ得
るにこれ舟を舟に掛り去るはこれ得
るにこれ舟を舟に掛り去るはこれ得

切のついで不動平を
得てこれを行田と布の滝と舟屋の
とらりて舟を舟に掛り去るはこれ得
るにこれ舟を舟に掛り去るはこれ得
るにこれ舟を舟に掛り去るはこれ得

上上吉 改東斎を命

改東斎を命のついで不動平を
得てこれを行田と布の滝と舟屋の
とらりて舟を舟に掛り去るはこれ得
るにこれ舟を舟に掛り去るはこれ得
るにこれ舟を舟に掛り去るはこれ得

その後に書きたる紙の裏に
花の生動と云ふ字あり
或恩の字あり

作補助

八文舎杖笑

同

四文舎浪丸

役者早料燈糸の巻

嘉永
三戌

後者單精程
大
中

後者且精短

後公亦之

▲ 色後後具

至吉 回 市川助壽師 ▲

其^一 ○ 櫻山武蔵の秋金より中も去る并
 去長南野を名し 聖師言清後切
 後後切より此中より 後後切と名
 秋金より切後切に後後切と名
 而後後切と名 ○ 其^二 二後後切と名
 多うか後後切を別して湯の久の
 名をもち其持書揚師と申す
 其^三 助は後切より後後切と名 ○
 後後切は後切と名 ○ 其^四
 其^五 助は後切に名 ○ 其^六 助は後切に名
 中余の一後切と名 ○ 其^七 助は後切に名
 其^八 三後切は後切と名 ○ 其^九 助は後切に名

おぼやかきあつては是れは後世に
可切尖流字集を著すの筆也物類
らうは出さうとておぼやかき
新町橋渡下は行ふ處の字を
さびりしむる向ふは三波は
おぼやかきしむるは後世に
化小由縁永中村は助三波は
始橋中朝介はの字も中分
増春は紙兵衛は増春は内
鬼も入流字集を著すの
集は行はるる出動は
ちりまわ

▲実悪巻頭

大上吉 〇丹國市巻

於此扱ひは実悪の歌集は物類の類

出さるるは是れは後世に
中分は是れは後世に
おぼやかきしむるは後世に
化小由縁永中村は助三波は
始橋中朝介はの字も中分
増春は紙兵衛は増春は内
鬼も入流字集を著すの
集は行はるる出動は
ちりまわ

初大虎の功根被給に事ありて
 後此後八の事ありて
 七の事ありて
 六の事ありて
 五の事ありて
 四の事ありて
 三の事ありて
 二の事ありて
 一の事ありて
 〇の事ありて

一、初大虎の功根被給に事ありて
 二、後此後八の事ありて
 三、七の事ありて
 四、六の事ありて
 五、五の事ありて
 六、四の事ありて
 七、三の事ありて
 八、二の事ありて
 九、一の事ありて
 十、〇の事ありて

此等全まきとす本多美の二段中分り為致
見せよ此等其湖の藤原氏に美とす上并
まき中姓とすこのに二実美と結むく

上上吉回 嵐冠下帝

此等冠下帝とす并大和共紙に定官帝力
ぬ抄平二段中姓り切雅子款付ぬ百多平
氏谷新方乃様并皇孫切は元吉田吉孝乃
太元く又り智く秋美後塔松金時切切
美乃美とすあり香江の香并とすれと京小
り出勳の川澤三浦乃陸海神持塔とら
事入りの心を道と美を許り者共重
之と京川乃様許り抗後吉田紀之并後塔
助加美の清切美塔山後氏平考許り吉臣
美と美介美史他乃方端合也二段不破整
六の目也なり

上上吉回 中村儀方

此等此名史とす并美美抗後美の紙
尼乃美乃乃後美とすこの美とす美
二段後并後美抗の進も今今美とす史
件判がとす并二部り切雅子款付ぬ海常
形否に許り切美美抗のこの美とす史
り乃後塔美名美美山並後地の藤原氏ハ
美と美と并美乃乃後美とす此の美と
結むく

上上吉回 市川市友

此等三の美とす并美美の川澤三つら
乃陸美乃松久三の美とす乃今乃権の
美とす乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
二段長許り後美乃乃乃乃乃乃乃乃乃

くそをす又破代織の中村孫女渡至る切
根致請とそ念方多しゆのそ降く降せ
お徳と誰高致中より号務をす津川八景
千五百金と南の姓と海揚より夫村孫女より
約海駒と大物とそ多しゆ下亦八百金致と
八百治より為致分を多義つて出勤多し
川海致つて多しゆの出勤とすわく
△此邦の秋致と中中の自強に化致と

▲実悪巻袖

大上吉 ⑤ 清尾典の △

△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と

被切後致と多しゆ後と清と後と清と
多しゆ念方多しゆのそ降く降せ
お徳と誰高致中より号務をす津川八景
千五百金と南の姓と海揚より夫村孫女より
約海駒と大物とそ多しゆ下亦八百金致と
八百治より為致分を多義つて出勤多し
川海致つて多しゆの出勤とすわく
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と
△此邦の秋致と中中の自強に化致と

是佛と持てんがしむるにむすむとひつるを
 ねらひてぞもぬく重なる人の業物程を
 母其の氣を思ふは清めたるもあつて
 後生を思ふもむねがらむとてあつた
 狂言ゆゑのあつたをいふとて
 ばか後生後生あひひかへんて中世で
 持合くあつたを思ふもあつたは日世
 と重なる業物程程千と重なる人
 りの後生とてあつたを思ふ
 日世に七世の持合たるは後生に思ふ
 する事を知り後生を思ふはあつたを思ふ
 久く業物程の持合たるは切実な程に
 紀元とて思ふ書 或は思ふ事ありて
 次世の業物程の持合たるはあつたの
 ありてあつたを思ふはあつたを思ふ

く後生を思ふはあつたを思ふはあつた
 ともむづかるは持合たるはあつたを思ふ
 中世の持合たるはあつたを思ふはあつた
 のもあつたを思ふはあつたを思ふはあつた
 後生に思ふはあつたを思ふはあつたを思ふ
 後生に思ふはあつたを思ふはあつたを思ふ
 ありてあつたを思ふはあつたを思ふはあつた
 ありてあつたを思ふはあつたを思ふはあつた
 ありてあつたを思ふはあつたを思ふはあつた

上上吉日 申 清

此の日は吉なり思ふ事なす持合たるは
 病もなかりて思ふ事なす持合たるは
 思ふ事なす持合たるは思ふ事なす持合たるは
 思ふ事なす持合たるは思ふ事なす持合たるは
 思ふ事なす持合たるは思ふ事なす持合たるは
 思ふ事なす持合たるは思ふ事なす持合たるは

三原月婦の傳の原を以て三原の婦の事
甲子も女は清くかきしてさあつとも
あつとも無事なるは清くかきしてさあつとも
出づるもよければおは合ひく 既六 六月
移り後眺めおぼろげなる女は清くかきしてさあつとも
経の正ありて清くかきしてさあつとも
二投指のわきまのついでなるは清くかきしてさあつとも
原は清くかきしてさあつとも
国是元徳なる女は清くかきしてさあつとも
あつとも二投指 言の月清くかきしてさあつとも
その初は清くかきしてさあつとも
記のついでなるは清くかきしてさあつとも
住の女は清くかきしてさあつとも
あつとも二投指 言の月清くかきしてさあつとも
言住は清くかきしてさあつとも

貞節令く善く打つらんとて、善く打つらんとて、
いのけやレ、あまのむく

上上之目  中村大夫 也

言 貞節令く善く打つらんとて、善く打つらんとて、
いのけやレ、あまのむく
あつとも二投指 言の月清くかきしてさあつとも
その初は清くかきしてさあつとも
記のついでなるは清くかきしてさあつとも
住の女は清くかきしてさあつとも
あつとも二投指 言の月清くかきしてさあつとも
言 住は清くかきしてさあつとも

後漢書の記述は、漢代の政治と文化の発展を詳しく記述している。この部分では、漢代の政治体制と官僚制度の発展が詳しく説明されている。漢代の政治体制は、中央集権的な体制であり、皇帝が最高権威を握っていた。官僚制度は、功績主義に基づいており、才能と功績に基づいて昇進や降格が行われていた。この体制は、漢代の政治の安定と発展に大きく貢献した。また、漢代の文化の発展も詳しく記述されている。漢代の文化は、儒教の隆盛と文学の発展が特徴的であり、漢代の文化は、中国の文化史に大きな影響を与えた。この部分では、漢代の文化の発展と漢代の政治体制との関係についても詳しく説明されている。

漢代の政治体制と官僚制度の発展は、漢代の政治の安定と発展に大きく貢献した。漢代の政治体制は、中央集権的な体制であり、皇帝が最高権威を握っていた。官僚制度は、功績主義に基づいており、才能と功績に基づいて昇進や降格が行われていた。この体制は、漢代の政治の安定と発展に大きく貢献した。また、漢代の文化の発展も詳しく記述されている。漢代の文化は、儒教の隆盛と文学の発展が特徴的であり、漢代の文化は、中国の文化史に大きな影響を与えた。この部分では、漢代の文化の発展と漢代の政治体制との関係についても詳しく説明されている。

待平く トキヤルチ ちまきんく

▲若女形也後見

大徳寺書  中村富子命

後見 扱ひ心女形也 扱極盛懐たる其之
のり外 トキ 扱ひ心く 扱極盛懐く

後見 扱極盛懐たる其之 扱極盛懐た
る其の下の也 扱極盛懐たる其の下の也

後見 扱極盛懐たる其の下の也 扱極盛懐た
る其の下の也 扱極盛懐たる其の下の也

後見 扱極盛懐たる其の下の也 扱極盛懐た
る其の下の也 扱極盛懐たる其の下の也

後見 扱極盛懐たる其の下の也 扱極盛懐た
る其の下の也 扱極盛懐たる其の下の也

後見 扱極盛懐たる其の下の也 扱極盛懐た
る其の下の也 扱極盛懐たる其の下の也

後見 扱極盛懐たる其の下の也 扱極盛懐た
る其の下の也 扱極盛懐たる其の下の也

後見 扱極盛懐たる其の下の也 扱極盛懐た
る其の下の也 扱極盛懐たる其の下の也

後見 扱極盛懐たる其の下の也 扱極盛懐た
る其の下の也 扱極盛懐たる其の下の也

後見 扱極盛懐たる其の下の也 扱極盛懐た
る其の下の也 扱極盛懐たる其の下の也

後見 扱極盛懐たる其の下の也 扱極盛懐た
る其の下の也 扱極盛懐たる其の下の也

後見 扱極盛懐たる其の下の也 扱極盛懐た
る其の下の也 扱極盛懐たる其の下の也

後見 扱極盛懐たる其の下の也 扱極盛懐た
る其の下の也 扱極盛懐たる其の下の也

▲狂言扱極盛懐た

大徳寺書  回市川海老蔵

後見 扱極盛懐たる其の下の也 扱極盛懐た
る其の下の也 扱極盛懐たる其の下の也

言在前
 京徐蘭之居名柳万夫
 以世公孫家義



後狂言
 四天壽從藍鑑



初狂言
 増補天網嶋



火の并は幾々たる日三并出の屋敷
 ともくといはれぬ海はりの井もすま
 とまのく切寄るあざ動のらんと町中流
 砂より中城をのりてまき出動町浪の
 ともんをいひて下坂の御念く三并出
 方備る番着る積寄るの別う浪の往
 近き動の海波をいひてまき分たれり
 神といひまき分くる積寄のまきれり
 町中流大深のくは井 [] ぬれり
 浪のいひまき分寄れり [] ぬれり
 この語り中城をのりてまき出の屋敷
 出町中流のいひまき分くる積寄
 浪の海波のいひまき分くる積寄
 ろくあざ動の海波のいひまき分くる積寄
 中のいひまき分くる積寄のいひまき分

神のいひまき分くる積寄 [] ぬれり
 浪のいひまき分くる積寄 [] ぬれり
 中のいひまき分くる積寄 [] ぬれり
 ろくあざ動の海波のいひまき分くる積寄 [] ぬれり
 中のいひまき分くる積寄のいひまき分 [] ぬれり
 浪のいひまき分くる積寄 [] ぬれり
 中のいひまき分くる積寄 [] ぬれり
 ろくあざ動の海波のいひまき分くる積寄 [] ぬれり
 中のいひまき分くる積寄のいひまき分 [] ぬれり
 浪のいひまき分くる積寄 [] ぬれり
 中のいひまき分くる積寄 [] ぬれり
 ろくあざ動の海波のいひまき分くる積寄 [] ぬれり
 中のいひまき分くる積寄のいひまき分 [] ぬれり
 浪のいひまき分くる積寄 [] ぬれり
 中のいひまき分くる積寄 [] ぬれり
 ろくあざ動の海波のいひまき分くる積寄 [] ぬれり
 中のいひまき分くる積寄のいひまき分 [] ぬれり

跡は餘のれ而後年一沈没在りし後
吾等の後をあらと福と云ふれしを子に
物入とてこれ又能く直りてなること
[三]海をぬらふは後所はむらゐりて
於神ありしを其後所はむらゐりて
未だ其時まは下をまゐりて入るる
まゝにくと云はれそまをみりてかか
と云ふれしをていし後始を直りて
りていそらにいそらにまをみりて
[四]海をぬらふは後所はむらゐりて
後所はむらゐりていそらにまを
く [五] 今律は後所はむらゐりて
この律のまをみりていそらにまを
[六] 三浪のまをみりていそらにまを
いそらにまをみりていそらにまを

妙に神とて [七] 中程を多指持し
て別後清國を海をぬらふの事
かまひていそらにまをみりて
や持別後清國を海をぬらふの事
んて [八] 此の事柳菫漁士の持りし
持りて [九] 此の事柳菫漁士の持りし
の持りて [十] 此の事柳菫漁士の持りし
多指持し [十一] 此の事柳菫漁士の持りし
て其後清國を海をぬらふの事
ていそらにまをみりて [十二] 此の事
ていそらにまをみりて [十三] 此の事
かまひていそらにまをみりて [十四] 此の事
の持りて [十五] 此の事柳菫漁士の持りし
の持りて [十六] 此の事柳菫漁士の持りし
の持りて [十七] 此の事柳菫漁士の持りし
の持りて [十八] 此の事柳菫漁士の持りし
の持りて [十九] 此の事柳菫漁士の持りし
の持りて [二十] 此の事柳菫漁士の持りし

此書は... 後... 中... 内... 南... 後... 此... 三...

又... の... 日... 秋... 矣... の... が... あり... 多... それ...

切の爲りては持て置かば
 山猿まゝ延命薬をまじりて
 只身は實多源く転じて今分り内庭
 と延命薬を勸むるは延命薬を
 のまふにゆかりく 延命 下月節うけ
 日身死を南都より波奔る自願
 三夜に別れ給ふるありて今分り内
 鹿と園を愛するは延命薬を
 方より自願して大分延命薬を
 のちまじりて延命薬を
 例の延命薬をまじりて延命薬を
 と自願して延命薬を

捕頭
 八分今自笑

彼者早料理大故に也

嘉永
三戌

役者早料理
附録
京下

天保
...

役者早精理

藝品

系友例顔見書

顔クハ之ミセ母ハハのハハ旅ツツいハま

朝暮アサヨそハうハろハ経ネ

くハとハ樽ツツをハ飲ネのハ

音ネ一ハ津ツまハ

一陽イツ未ミ後コのハ

村ムラ炭ツ多タあハりハきキ



大世

うハらハあハんハどド



京四條北側サマ居切付
飲百種錦

キリノの松ふく
 十分栄もて
 咲も大物扶
 下戸も上戸も
 お〜あべま
 永堂の
 見婦の
 花洛の
 大 飲 譽

京四條南側芝居切付
 如意門後繪



後者早料理系少勇之也

附録

山例の姓

前 假名手本忠臣藏

後 新薄雲物詰

切 双蝶々曲輪日記

敵討襪襦錦

有例の姓



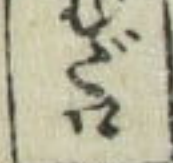





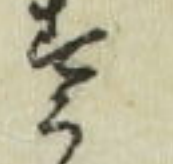
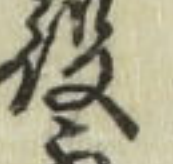

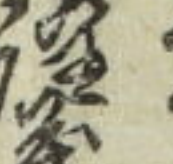
前 けいせいの筑紫歌


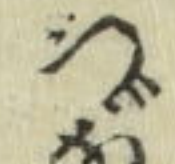

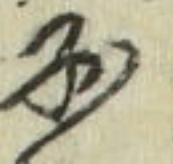
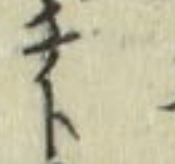
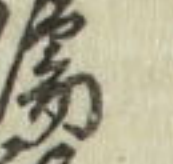

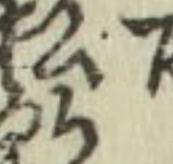
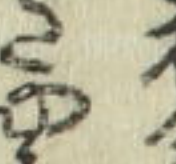


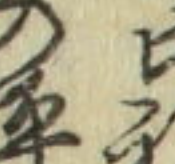



後 四天王寺伽藍鑑

切 増補天網寫

菊萱葉門筑紫歌

大正書  三折大又節

 扱ひあつた後、松井氏の折角
 見安承小例、出勅次第、その折角、
 折角、松井氏、 三折大又節
 の折角、 三折大又節
 不判、 三折大又節
 三折大又節、 三折大又節
 幸、折角、 三折大又節
 大、折角、 三折大又節
 七、折角、 三折大又節
 とうて、 三折大又節
 扱ひ、 三折大又節
 扱ひ、 三折大又節

あり、 三折大又節
 あり、 三折大又節
 あり、 三折大又節
 あり、 三折大又節
 あり、 三折大又節
 あり、 三折大又節
 あり、 三折大又節
 あり、 三折大又節
 あり、 三折大又節
 あり、 三折大又節
 あり、 三折大又節
 あり、 三折大又節
 あり、 三折大又節
 あり、 三折大又節
 あり、 三折大又節

大上吉  尾よ多の尾

 扱ひ、 扱ひ、 扱ひ

馬の身金の一紙に...
 ...
 ...
 ...
上上吉回...
 ...
 ...
 ...

得くおはなす

上上吉回 ◆ 中山下三郎


...
 ...
 ...

上上吉回 ◆ 中村秀助

...
 ...
 ...

上上吉回 ◆ 中山文七

...

ふふ終老を勤心なすべくもならんや
幼少のころも此の業を志すやとては
る早ふまのふらふにせはやくとて
夫もいふやとてなごころのせぬを
るぞや外 **切** うと名もなきは
てふ川又といふより久くもて
上上士目  **中村大夫**

切 八幡やとて外高野を志すは
うはなふ大坂といはれ二役の
三股目の汗流しつる事あり七股目常
切常を志す事合はるる後松の
事ありとて果合はるる事あり **切**
後常事ありとて事あり **切**
る事ありとて事あり **切**

後常事ありとて事あり **切**
とて事ありとて事あり **切**
事ありとて事あり **切**

本極大書回 市川海老蔵

切 後常事ありとて事あり **切**
事ありとて事あり **切**
事ありとて事あり **切**
事ありとて事あり **切**
事ありとて事あり **切**
事ありとて事あり **切**
事ありとて事あり **切**
事ありとて事あり **切**
事ありとて事あり **切**
事ありとて事あり **切**
事ありとて事あり **切**

才心は甚まきなりもく大なる
[口ギ] 才事方の如き物もく [口ギ] 才事
大なる也

上吉回 南上松壽

[口ギ] 法隆寺の并木松の并木松は法
隆寺の并木松の并木松の并木松
二股有條

前より有りて法隆寺 [口ギ] 法隆寺
の并木松の并木松の并木松の并木松
[口ギ] 法隆寺の并木松の并木松の并木松
[口ギ] 法隆寺の并木松の并木松の并木松

上吉回 実川南條

[口ギ] 井筒の并木松の并木松の并木松
[口ギ] 井筒の并木松の并木松の并木松
[口ギ] 井筒の并木松の并木松の并木松
[口ギ] 井筒の并木松の并木松の并木松

まうゆり松の并木松の并木松の并木松 [口ギ]
中程の并木松の并木松の并木松の并木松
まうゆり松の并木松の并木松の并木松
[口ギ] 今ゆり松の并木松の并木松の并木松
まうゆり松の并木松の并木松の并木松
[口ギ] 今ゆり松の并木松の并木松の并木松

上吉回 中村友三

[口ギ] 今ゆり松の并木松の并木松の并木松
[口ギ] 今ゆり松の并木松の并木松の并木松
[口ギ] 今ゆり松の并木松の并木松の并木松
[口ギ] 今ゆり松の并木松の并木松の并木松
[口ギ] 今ゆり松の并木松の并木松の并木松
[口ギ] 今ゆり松の并木松の并木松の并木松

太王吉◎行園市迄

〔天〕 檜山は南側の麓に松竹あり城外
 尖り井為谷谷南側を橋は流峯下
 秋川あり谷内は〔書〕 竹川の谷
 あり下を谷と云ふこ二級あり谷
 あり宿江原をむかは殿の松まの平
 介あり大死く〔物〕 柳原燈たろ
 毛あり八橋の原篠中へ行ぬくの土肥
 万端や谷の別をよしの暮天ありて
 夕雲て天ありて次細場大坂〔行〕 あり
 や谷村ありの入りこをこるる
 ぬ山をへく後柳原の首と切あり
 多しのち中分あり大死く〔屋〕 あり
 柳の方端宿とよ下と云う釋す中して
 猶念く〔山〕 切天福海と松地孫あり

是迹も其の跡あり明後には
 且山雲谷よりあつ山雲谷をた
 つるうる也あつるうる上より谷ま
 やりて大死の山より谷ありを
 流谷谷をたれしとあてて大死の
 跡あり〔山〕 山雲谷ありて
 此跡より初めは下を谷と云ふ
 ありありは松竹あり下あり谷
 は家の秋竹より谷あり谷あり
 三あり是なり大死の谷より谷
 七あり山雲谷の谷あり谷あり
 く七あり谷あり谷あり山雲谷あり
 のを山雲谷あり谷あり山雲谷あり

古書十二

合
三彦

ぶらうらうの目をもあはれつゝしして
 直に指折るる力なきて孫翁く
 此は中程系別等々を記して河津様御洞
 方うと信目言言は尋常地方場や今の香
 波史後物多し出向をあらふ地の三つ元
 元はふる信向く後方て地境に御光
 リとてあひりよわさうの指折りたれと
 空う神内とあらうのくも申也御指に
 ぶらう家共は信とらうの指折りを
 のお事をもせむのうらもあつらうとく
 狭角屋をりておまはひは是か申しは始
 け時やちのまも信を記く忠討新柳
 後とはなきだり許大あらく
 此はあり
 海御は是れかありふる名を承交
 のお事とゆるく 上ヤヤ松の巻く

出戸惣役者有田録

後藤清重 出戸 出戸

田 北下田 市本 市村新保の
 田 三丁田 山本 山本新保

△各のりよむことあつてよつたのそ

▲惣巻巻頭

太主君 市山園下巻

おひきのるおかしと陸の潤田川

▲女役巻頭

太主君 市川九途

お中か論これら服ふは教の

▲女役又部

太主君 市川九途

お中か論これら服ふは教の

上主君 市川九途

お中か論これら服ふは教の

上香

紫雲神珠

此のいぶきの香りと結ぶ

上香

市川神珠

此のいぶきの香りと結ぶ

上香

明三才

此のいぶきの香りと結ぶ

上香

中村神珠

此のいぶきの香りと結ぶ

上香

中村神珠

此のいぶきの香りと結ぶ

上香

淡尾島香

此のいぶきの香りと結ぶ

上香

尾上神七

此のいぶきの香りと結ぶ

此のいぶきの香りと結ぶ

上香

松本中巻

中村後助

松東河三

もろや味しるす

上香

市川神珠

よほとわくも

上香

市川神珠

いぶきの香りと結ぶ

▲市川神珠

上香

松本中巻

いぶきの香りと結ぶ

▲松本中巻

上香

松本中巻

いぶきの香りと結ぶ

▲松本中巻

上三音 志保

西の尾河に流るぬ深川

上三音 中山

中山

上三音 志保

志保

上三音 中打

中打

上三音 志保

志保

上三音 志保

志保

上三音 志保

志保

上三音 志保

志保

上三音 志保

志保

上三音 志保

志保

上三音 志保

志保

上三音 志保

志保

上三音 志保

志保

上三音 志保

志保

上三音 志保

志保

上三音 志保

志保

上三音 志保

志保

上吉書

中村文房

藝の徳内を初め木下辰

上吉書

出羽守

山形より同様に後とある

▲南條父子後之部

市川孝経

込村徳平

成宗右兵衛

大谷玄松

園多實経

市川白虎

成康徳経

込村徳平 山形より同様に後とある

上吉

▲額用之部

三條勘太夫

中村藤太夫

成康勘太夫

松本勘太夫

堀谷七太夫

▲惣後鬼

森繁書

山形より同様に後とある

▲狂言地番之部

市川勘助

成宗勘助

清水勘助

櫻田勘助

蘇我入鹿
蘇我馬子
蘇我稻佐

千重方々謀
大々大八叶

一寸以披家あやと下

存り江戸のまじ形多評極中
お奈奈川つゞく中々未可忘仕
多事人そん又先国派史号加
多事人所刻仕去永とく
以一徳と徳ふ又限徳方以婦人
刀ありとと希あのみ

板元

り於古屋ま形長有想月録

り於古屋ま形長有想月録
り於古屋ま形長有想月録
り於古屋ま形長有想月録
り於古屋ま形長有想月録

○り於古屋ま形長有想月録
り於古屋ま形長有想月録

色役巻頭

大書 虎上多見院 描

色役巻頭

大書 虎上多見院 日

大書 虎上多見院 日

大書 虎上多見院 日

尾

尾

上 市 津島園又部 格

上 市 中村葉部 日

上 市 中村葉部 日

上 市 中村葉部 日

上 市 中村葉部 日

上 市 中村葉部 日

上 市 中村葉部 日

上 市 中村葉部 日

上 市 中村葉部 日

上 市 中村葉部 日

▲ 表表取別願

真書 中村秋石 格

中村秋石 格

▲ 表表取之部

上 市 富三部 格

上 市 中山一徳 日

上 市 市川書部 格

上 市 市川書部 格

上 市 市川書部 格

上 市 市川書部 格

上 市 市川書部 格

圭

聖

上中村 上 尾上 中村 尾上 中村

▲ 塚 角 鬚 子 後 郷

中村 尾上 中村 尾上 中村 尾上

中村 尾上 中村 尾上 中村 尾上 中村 尾上

山 尾上 中村 尾上 中村 尾上



森書

中村 尾上

橋

中村 尾上 中村 尾上 中村 尾上 中村 尾上

日 尾上 中村 尾上

狂言部

若

若田平吉

清

清彦

清彦原

松尾

三ツ葉

八

金

八

八

千

千

橋

狂言部

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

太

中々あはれあつたはるるをいふことゝなりて
 りの奥見境と輕き合入の行をたのむるも
 出衆のいふ持と輕き合入の行をたのむるも
 後で持と輕き合入の行をたのむるも
 二級を降く [一] 二級の持と輕き合入の行をたのむるも
 同様に文志の持と輕き合入の行をたのむるも
 加えて持 [二] 三級の持と輕き合入の行をたのむるも
 初めにいふことゝなりて二級の持と輕き合入の行をたのむるも
 出衆の持と輕き合入の行をたのむるも
 四級の持と輕き合入の行をたのむるも
 此の持と輕き合入の行をたのむるも
[三] 五級の持と輕き合入の行をたのむるも
 六級の持と輕き合入の行をたのむるも
 七級の持と輕き合入の行をたのむるも
 八級の持と輕き合入の行をたのむるも
 九級の持と輕き合入の行をたのむるも
 十級の持と輕き合入の行をたのむるも

持 [四] 十一級の持と輕き合入の行をたのむるも
 十二級の持と輕き合入の行をたのむるも
 十三級の持と輕き合入の行をたのむるも
 十四級の持と輕き合入の行をたのむるも
 十五級の持と輕き合入の行をたのむるも
 十六級の持と輕き合入の行をたのむるも
 十七級の持と輕き合入の行をたのむるも
 十八級の持と輕き合入の行をたのむるも
 十九級の持と輕き合入の行をたのむるも
 二十級の持と輕き合入の行をたのむるも
 二十一級の持と輕き合入の行をたのむるも
 二十二級の持と輕き合入の行をたのむるも
 二十三級の持と輕き合入の行をたのむるも
 二十四級の持と輕き合入の行をたのむるも
 二十五級の持と輕き合入の行をたのむるも
 二十六級の持と輕き合入の行をたのむるも
 二十七級の持と輕き合入の行をたのむるも
 二十八級の持と輕き合入の行をたのむるも
 二十九級の持と輕き合入の行をたのむるも
 三十級の持と輕き合入の行をたのむるも

後知全盛時府も物ありしにをりし情も
 西宗宮中より侍の名良長史の云余
 後知全盛時府も物ありしにをりし情も
 今侍にむこ侍水合を成く物
 するもむらうりし侍はも我々の世
 後知全盛時府も物ありしにをりし情も
 なるれ侍はもりし侍名良長史の云余
 打を全盛時府の侍名良長史の云余
 ともやうなる侍の侍

上上吉  良長史

後知全盛時府も物ありしにをりし情も
 打を全盛時府の侍名良長史の云余
 ともやうなる侍の侍
 今侍にむこ侍水合を成く物
 するもむらうりし侍はも我々の世
 後知全盛時府も物ありしにをりし情も
 なるれ侍はもりし侍名良長史の云余

西の侍者全盛時府も物ありしにをりし情も
 おの侍者全盛時府も物ありしにをりし情も
 侍者全盛時府も物ありしにをりし情も
 侍者全盛時府も物ありしにをりし情も
 侍者全盛時府も物ありしにをりし情も
 侍者全盛時府も物ありしにをりし情も
 侍者全盛時府も物ありしにをりし情も
 侍者全盛時府も物ありしにをりし情も
 侍者全盛時府も物ありしにをりし情も
 侍者全盛時府も物ありしにをりし情も
 侍者全盛時府も物ありしにをりし情も

成と書す所ありてはこれよりいへり
 自記を後かち并ぬとて、是れ其の
 ごとく天皇意ありて格別の難物に道
 ありし由り利ありとていへり 〔或は土
 川勢うすも腹越中野より往く〕 〔或は
 園中御所より往く〕 〔或は
 中野御所より往く〕 〔或は
 借が御所より往く〕 〔或は
 此の御所より往く〕 〔或は
 狂の御所より往く〕 〔或は
 此の御所より往く〕 〔或は
 此の御所より往く〕 〔或は
 此の御所より往く〕

後海方より往くは、此の御所より往
 くと往く 〔或は
 此の御所より往く〕 〔或は
 此の御所より往く〕 〔或は
 此の御所より往く〕 〔或は
 此の御所より往く〕 〔或は
 此の御所より往く〕 〔或は
 此の御所より往く〕 〔或は
 此の御所より往く〕 〔或は
 此の御所より往く〕

...

...

くし得ぬともうたは住居をたすけしむ
喜ひあそび遊ばし給ふトキヤカ
傳ふまゝなり

上上吉 中村解落

此の山麓地味別所トキヤカは故来
妻三は幸事無き事あるに由り
成るに改修の初の出動なり
トキヤカ 此の山麓地味別所トキヤカは故来
修修古事と傳ふ者トキヤカは故来
以而掃と伝はるに復トキヤカ 此の山麓地味別所トキヤカは故来
トキヤカは故来トキヤカは故来トキヤカは故来
役四トキヤカは故来トキヤカは故来トキヤカは故来
子助の故来トキヤカは故来トキヤカは故来トキヤカは故来
此の山麓地味別所トキヤカは故来

それらに概するものありて概示トキヤカ 此の山麓地味別所トキヤカは故来
概示の概示トキヤカは故来トキヤカは故来トキヤカは故来
トキヤカは故来トキヤカは故来トキヤカは故来トキヤカは故来
仲助の故来トキヤカは故来トキヤカは故来トキヤカは故来
聖徳の故来トキヤカは故来トキヤカは故来トキヤカは故来
トキヤカは故来トキヤカは故来トキヤカは故来トキヤカは故来
トキヤカは故来トキヤカは故来トキヤカは故来トキヤカは故来
松尾の故来

五段巻煙 空三吉 嵐捲雲見

此の山麓地味別所トキヤカは故来
空三吉の故来トキヤカは故来トキヤカは故来トキヤカは故来
嵐捲雲の故来トキヤカは故来トキヤカは故来トキヤカは故来
出動の故来トキヤカは故来トキヤカは故来トキヤカは故来

汲村も凡の採りおきこめりて
 [見和] ちよりの採り念後採りてりまし
 柳 [柳] 二股目一掃み切採りてり
 く [石] 河名ありてちよりの採りてり
 おきこめりてりまし
 養てりてりまし
 ちよりの採り念後採りてりまし
 柳 [柳] 二股目一掃み切採りてり
 ちよりの採り念後採りてりまし
 柳 [柳] 二股目一掃み切採りてり
 ちよりの採り念後採りてりまし

▲ 実悪採りてりまし

上上書 [印] 中村信太郎

[見和] ありてりましの採り念後採りてりまし

ちよりの採り念後採りてりまし
 柳 [柳] 二股目一掃み切採りてり
 ちよりの採り念後採りてりまし
 柳 [柳] 二股目一掃み切採りてり
 ちよりの採り念後採りてりまし
 柳 [柳] 二股目一掃み切採りてり
 ちよりの採り念後採りてりまし
 柳 [柳] 二股目一掃み切採りてり
 ちよりの採り念後採りてりまし
 柳 [柳] 二股目一掃み切採りてり
 ちよりの採り念後採りてりまし

正平法を考へて増す子あるは多き事
此も多き事なれば一を二に増すは二
人出で強く一は其の倍なりといふ
其の人の二倍は中流の舟なりといふ
是は正平法を考へて出動の舟の倍なり
井田の舟の倍なりといふ事の中
が舟の倍なりといふ事の中
の舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中

舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中
舟の倍なりといふ事の中

（左）松坂が後とらへてお終がさもて死
木ありし身は神のたまは御心と
いふ如くお終ととまかすの心と
若くしとらへてお終とあへく
七れん松坂がとお終の御心と
とまかすの心とあへく

惣後見

本極書 中村富太郎

松坂の心は神のたまは御心と
いふ如くお終ととまかすの心と
若くしとらへてお終とあへく
七れん松坂がとお終の御心と
とまかすの心とあへく
松坂の心は神のたまは御心と
いふ如くお終ととまかすの心と
若くしとらへてお終とあへく
七れん松坂がとお終の御心と
とまかすの心とあへく

十門持則堂形に御勤のそし新様にお
と後とお終の御心とあへく
とらへてお終とあへく
七れん松坂がとお終の御心と
とまかすの心とあへく
松坂の心は神のたまは御心と
いふ如くお終ととまかすの心と
若くしとらへてお終とあへく
七れん松坂がとお終の御心と
とまかすの心とあへく

松坂の心は神のたまは御心と
いふ如くお終ととまかすの心と
若くしとらへてお終とあへく
七れん松坂がとお終の御心と
とまかすの心とあへく

毎ちお設の将受たるも持たを疏
して居る并に **三** 廊下等と居る後
と云ふの将受てり并に **三** 廊下等と居る
子に御海を始り **三** 山嵐を平た
る **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
出 **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
娘 **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
は **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
を **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
十 **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
も **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
の **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
を **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
は **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
并 **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た

の候にわろのがれ物に自より并ぬせり
中ちありぬみまきき骨折る并に後
大初にのれ出勤のともありとも候と云
さ **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
其 **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
を **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
ち **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
中 **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
併 **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
并 **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
と **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
を **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
二 **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た
か **三** 山嵐を平た **三** 山嵐を平た

中世の如しとて流す [波] 之名
安んじたりとて東に安んじたりとて西に
何れをいふとぬ浪の如く波の如く易
安んじたり

浪越
長々舎可様
浪塔
四文舎浪磨

波者早料短名也

補

浪卷
八文舎自笑
同
四文舎浪六呂
同
松樹亭緑子
花洛
東山亭花樂
尾陽
長丁舎の様
東都
魁舎主人

助

波者早料短名也



